

日田の木を「材」とし 世の「財」となり 300年

この一枚板は、「ヤブクグリ」。心材が独特の濃赤褐色で、木目細かく粘り強い、日田杉を象徴する気骨ある在来種です。延徳3年（1491）、中津江村の梅野神社にご神木として初めて杉が植えられ、享保年間（1716―35）、杉の挿し木造林が始まりました。その歴史は山、川とともにあり、今なお優れた「材」をつくり続けている、林工のまちとして名を馳せる、日田です。

日田木材協同組合



九州三大美林のひとつ 日田杉林の山

先人から受け継ぐ、この天へとまっすぐに育つ杉林の風景は、鹿児島屋久杉、宮崎の鉄肥杉とともに、九州三大美林のひとつに讃えられる日田杉林です。阿蘇の外輪山と九重連山に源を発するせせらぎは、大山川、玖珠川となり、英彦山から流れ出る川と合流し、日田の地で三隈川へ。やがて筑後川、そして有明海へと注ぎ込みます。

江戸時代、幕府直轄地の「天領」であった日田。明治維新となっても、ほぼ民有林という全国でも稀な林産地となりました。伐り出された丸太は数ヶ月の乾燥を経て、人の肩や修羅、木馬を使って二本一本運ばれて谷川を流れ、三隈川河岸で花筏に組まれ、大川をはじめ、九州各地へ。日田の林業の発展は筑後川の水運とともにありました。



山ありて この水郷あり

やがて、造林が爆発的に進んだ明治時代、34年には、初の電力による製材所が誕生します。筑後軌道にはじまる陸路の発展、夜明ダム建設によつて300年続いた筏流がその役割を終えるまで、この三隈川は、日田杉を運んできました。そこには今、戦後復興で「観光さかんに 林工さかんに」とかたちづくられた水郷日田温泉郷の風物詩、屋形船の姿があります。激動の時代に翻弄されながらも、住まいから家具にいたるまで暮らしの中に静かに在る木材を、今日も送り出す日田。60もの製材所が今も営む、歴史ある林工のまちです。

心が強い日田杉 美しき時を経た艶

四方を杉の美林に囲まれた盆地が三隈川の流れに沿ってミルタ色のベールにつまれる「底霧」は日田の風物詩です。この霧と湿度が杉の挿し木に適していることから、日田の地に林業が発達してきました。

挿し木された杉が、家の建築材となるまでの、数十年から百年、時に数百年という時、植林をしてから草に負けぬよう行う下刈り、まっすぐに育てるための枝打ち、そして良い木を残すための間伐、原木市場に横たわる丸太の年輪、本肌、節の表情には、日と風と、人の手による山仕事跡という歴史がしっかりと刻まれています。

虫や湿気に強い心の赤身が多く、建材として秀でた性質をもった「日田杉」。しかし、木のもつ独特のそりやねじれ（成長応力）の少ない優れた「材」が生まれる舞台裏には、丸太を見極め、どう板や柱をとるかという「木取り」における職人の技や、伝統の自然乾燥から、狂いの少ない建材を短い期間で実現する燻煙熱処理、マイクロ波などの「乾燥工程」の探求があり、日田杉を知り尽くした各製材所の叡智があります。



木馬出し



木材積上、運搬作業

日田の木を 知り尽くし

- 1491(延徳3)
- 1632年(寛永9)
- 1681(3)
- (天和年中)
- 1716(35)
- (享保年間)
- 18世紀中頃
- 1817(文化14)
- 1826(文政1)
- 1866(慶応4)
- 1882(明治15)
- 1884(明治17)
- 1901(明治34)
- 1902(明治35)
- 1931(昭和6)
- 1932(昭和7)
- 1934(昭和9)
- 1936(昭和11)
- 1941(昭和16)
- 1953(昭和28)

旧中津江村の梅野神社に杉が植ええられる
幕府の画題(天領)となる

筏運送による竹木商売が始まる。

(相良家文書・材木伐採出願書)

備前国の主五郎左衛門が山子を進んで入山した際に

入江村の藤八など3人が日産い棒きとしてこれに加わり

杉苗の植付や伐採、山林道具の製法までを学び取って帰り

これを契機に日田で杉の育林が始まり「郡盆」の基となる

(相良家文書・御一新後木方書物留)

木材を専門に扱う工屋が誕生する

名代官となった塩谷氏四郎正義が

「林ある村は林より立つべし、杉はこし木をよしとなす」と

杉の挿し木造林を奨励し、日田地方の造林が盛んとなる

豆田・隈街に中城河原、竹田河原が整備され、

筑後川水系を縦横に走る川船や筏による流通が本格化

明治維新による陸奥置置で、日田県が設置される。

日田木材業者による「竹木商組合」を組織

(日田木材協同組合の創立)

日田郡木材協同組合設立(日田木材協同組合の前身)

通称「横江館」と称される

日田農林学校創設(日田林工の前身)

日田で初めての電動機による製材工場ができる

久大本線が夜明まで開通し、日田材を大阪へ出荷

福岡の間屋を通じて、九州方面に輸出

久大本線が久留米から日田まで開通、貨車積が主流となる

第21回九州材木連合会大会が日田で開催

300名が参加し、三隈川に伐て千数百年の舞台をつくる

日田観光史上例をみない豪華な宴を開催

戦後の住宅復興で、製材木材業界が活況となる

夜明タムの完成により、300年に及ぶ筏流しが姿を消す



三隈川の筏旅しと温泉宿

山のために 環境を思い

暮らしへと木を循環させる匠
それが製材所です

その大切な乾燥工程で、限りある化石燃料を使わず、廃材や木皮などの再利用可能なエネルギーを活用するバイオマス乾燥機を導入し、廃棄物を出さない「ゼロエミッション」を達成している製材所も少なくありません。

日田市の森林率は83%。京都議定書で二酸化炭素の吸収量としてカウントされている「手入れされた人工林」を担うまちです。先人たちが植林してきた山が降る雨を保水し、せせらぎとなり川となって水郷の姿があります。環境に配慮し、国産材を代表する優れた「日田材」をつくり、木が暮らしの中で循環していくこと。それが製材所の思いであり、日田の風景を守ることにつながっています。



日田杉専門の製造所
煙たなびく乾燥機の燃料には
製材時に出る廃材を100%活用している

温泉のまち日田の風情ある町並みに、
カランコンと柔らかな音を響かせる伝
統工芸の「日田下駄」。日田杉や檜の
柔らかな感触が足にやさしい、江戸時
代から続く伝統工芸品です。明治後
半から漆器などとも盛んとなりクロ技術
が発展したおかげで、戦後から食堂用
の丸椅子と座卓などの生産が盛んとな
り、杉、檜を使ったリビングやダイニン
グセットなどの「脚物家具」の産地となっ
た日田。造り付け家具、テーブルウェア
も含め、暮らしの中の「木づかい」をト
タルで供給できるのが産地の誇りです。

進化しつゝ



時代にあつた発想で切り拓く新たな市場

そして、抜群の調湿性があり、癒し効果や集中力を高めるといわれる杉や檜の良さを活かし、今、日田では、各製材所の技術を活かした製品のデザイン、企画開発が盛んです。簡単にフローリングやウッドデッキなどの空間ができる「羽目板」、浮造りなど個性ある仕上げの板、設計者や工務店のニーズに応じた製材など、時代に耳を傾け、求められているものを発想豊かに生み出し、新たな市場を切り拓いています。



A close-up photograph of a light-colored wooden floor, showing the grain and several small, dark knots. In the background, a wooden structure, possibly a bed frame or a low wall, is visible, along with some green cushions or pillows.

乾燥の年月にもこだわった一枚板
製材所のネット通販による
流通も始まっている



- | | |
|------------|--|
| 1957(昭和32) | 組合型建築業として施工業者で素材を持ち寄り
第1回素材交換会を開催(日田木材協会の前身) |
| 1959(昭和34) | 日田木材協会の設立 |
| 1961(昭和36) | 日田木材協会の設立 |
| 1972(昭和47) | 葛原原木市場完成し、原木中目丸太の最高値を記録 |
| 1979(昭和54) | 協同組合連合会(日田木材流通センター)設立 |
| 1980(昭和55) | 新事務所(日田木材流通センター)完成 |
| 1987(昭和62) | 日田材製成加工協同組合設立 |
| 1989(平成元年) | 日田杉の需要開拓と技術文化の普及を評価され
日田木材協会の協賛省より「ふるさと産業50選」に認定される |
| 1993(平成5) | 日田森林産物サミット「第1回木材懇話会」開催 |
| 1994(平成6) | テーマは「木材産業が結果し、相互理解を深めよう」
広報紙「ひた木協だより」創刊 |
| 1995(平成7) | 阪神大震災の義援金を兵庫県庁へ |
| 1997(平成9) | 「日田杉産物館」をオープン |
| 1998(平成10) | 木材乾燥加工施設及び加工棟
日田木材流通センター事業完成 |
| 2006(平成18) | ウッドコンビナート内に日田木材協会の原木市場開設 |
| 2013(平成25) | ウッドコンビナート内に日田木材協会の新事務所及び
製成乾燥棟、加工棟竣工 |

今日も 良き「材」を つくります。

この一本、一枚が
線となり、面となり
木の空間をつくります

美林を育て、木を「材」となし、人び
との暮らしの中へと送り続けて300
年の歴史を歩み続ける日田。その「材」
は、木の香りに包まれた空間に住まう
人びと、訪れる人びとを癒やし、雨、
風から守り、財産となってきました。
それは、林工のまちとしての誇りであ
り、喜びです。

国内木材市場が厳しい中、業界を繋
ぎ、将来を見据えながら、ともに苦難
と激動の時代を乗り越えてきた「日田
木材協同組合」。一同、これからも、
木と「材」のプロフェッショナルとして、
さらなる歴史を歩んでまいります。



上／廣瀬淡窓の私塾「咸宜園」の伝統をくむ
日田市立咸宜小学校は、構造体まで日田杉を使った純木造校舎
机、イス、下駄箱などの家具も日田杉で
木の香りにつまれながら、子どもたちは日々学んでいる
下／檜専門の製材所の風景

この「日田杉資料館」は、全国でも珍しい木の資料館です。日田杉の構造用大断面集成材を使った木造建築で、建物自体が日田杉を使った展示物といえるほど素晴らしい空間となっています。館内には、樹齢数百年の銘木や杉の品種をはじめ、機械化される前に使われていた製材・伐採の道具、大工道具や継手、仕口などを展示し、木材産業に携わってきた人々の姿とともに学ぶことができます。日田杉の歴史を残したいとの思いから建設された日田杉資料館。未来を託す子どもたちにも、見て学べる貴重な施設として親しまれています。

写真 ● 杉山 / 森 秀輔 (日本写真協会会員・二科会写真部会員・二科会元大分県支部長)
三隈川の屋形船 / 日田市 木材積上運搬作業、木馬出し、うづくり / 日田木材協同組合
三隈川の筏流し / 井福 豊三郎 / 日田市立咸宜小学校 / 株式会社 内田洋行
その他 / 高山 美佳 (LOCAL & DESIGN Inc.)

参考文献 ● 日田木材協同組合百年史 日田木材協同組合 設立 50 周年記念史

日田木材協同組合の概要

設 立	日田郡木竹商業組合－明治 15 年
法人成立	日田木材協同組合－昭和 22 年 3 月 18 日
事務所棟	435 m ²
加工棟	260 m ²
製品倉庫棟	800 m ²
東有田敷地	16,429 m ²
恵良土場	20,721 m ²
日田駅前他	15,645 m ²

事業

- 生産、乾燥、加工、販売、購買、市売、保管、運送、検査、その他組合の事業に関する共同施設
- 組合員に対する事業資金の貸付（手形の割引を含む）及び組合員のためにする借入
- 組合員の福利厚生に関する施設
- 組合員の事業に関する経営及び技術の改善向上、または組合事業に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供に関する施設
- 組合員の経済的地位向上のためにする団体協約の締結
- 損害保険代理店業務及び林材共同事業代理業務
- 前各号の事業に付随する事業



日田木材協同組合

〒877-1371

大分県日田市大字東有田字新山 2776-6

TEL 0973-24-2167 FAX 0973-24-3945

E-Mail: hitamokkyo@wind.ocn.ne.jp

URL: http://www.hitasugi.jp

日田杉資料館の概要

所 在 地 大分県日田市南友田 126-1

敷地面積 723.95 m²

建物延面積 579.04 m²

1 階部分 417.64 m²

2 階部分 161.40 m²

建物構造 日田杉大断面集成材木造一部 2 階建

銘木明細	径級 (cm)	長さ (m)	材積 (m ³)
行者杉	92	12	11.059
宮園神社杉	88	13	11.123
宮園神社杉 (半分)	76	13	8.424
大原神社杉	86	8	6.195
元宮神社杉	72	13	7.608
戸山神社杉	92	7	6.120



日田杉資料館

〒877-0077

大分県日田市南友田 126-1

問合せ先 TEL 0973-24-2167 (日田木材協同組合)

E-Mail: hitamokkyo@wind.ocn.ne.jp

URL: http://www.hitasugi.jp